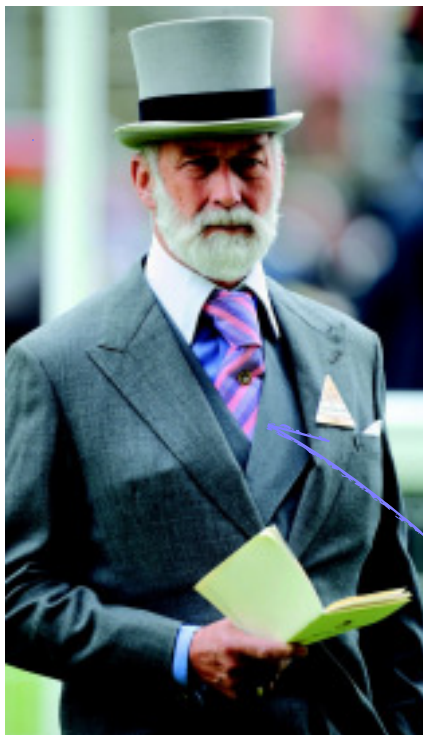


# その着こなしに理由アリ

文 中野香織

## 第18回



今年の6月、イギリス王室が所有するアスコット競馬場にて。幅広のネクタイにタイピン、ダブルのベスト、シャツは襟腰高くロングポイント。クラシカルがベースの、実に独創的なスタイル。  
Photo:Mark Stewart/Camera Press/アフロ

**ユ**ーヨークに、つい最近まで、通称「ネクタイ協会」があった。正式名称は、メンズ・ドレス・フーニシングズ・アソシエーション (Mens Dress Furnishings Association)。頭文字をとってM D F Aと呼ばれるこの協会は、ドレスシャツ、ネクタイを中心とするフーニシング(装身具)に関するアメリカ男性の意識を高めることを目的とするパブリック・リレーションズ組織で、小売店や学生に対する教育なども積極的におこなってきた。

アメリカ男性の服装意識向上に貢献してきたこの組織は、去る6月、60年にわたる歴史の幕を閉じた。「ウォールストリート・ジャーナル」によれば、最大の理由は、「男がネクタイを着用しなくなったから」。

もはやアメリカにおいてネクタイは、義務ではなく、選択肢のひとつになったようなのである。ギャラップ世論調査によれば、2002年、仕事にネクタイを着用する男性は10% (これでも低い数字だと思う) であつたのが、昨年は6%までに落ち込んだ。ネクタイを着用するのは会計士や弁護士などかざられた職種のみになった。

**ネ**クタイは、選択肢のひとつ。ネクタイはこのまま衰退の道をたどるのか? いやとんでもない。逆に、義務ではなくなったからこそ、ネクタイはこれまで以上に重要なファッションステイトメントになるのである! そう考えるデザイナーは少なくなく、たとえばトム・フォードはメンズウェアのラインで195ドル(2万円強)のリッチなイタリア製シルクネクタイを提案。お手下にしたのは、英王室のメンバー、プリンス・マイケル・オブ・ケントのタイであるという。

あのトム・フォードがメンズウェアの指針とする、プリンス・マイケル・オブ・ケント。なにももの?と思われる方も多いかもしれない。ケント公爵息マイケル王子、と日本語に訳されたりする。間違いではなくとも、王子と訳してしまうと、とりわけ今の日本語の現状では、微妙にニユアンスがずれるようにも感じる。7月4日生まれ、アメリカ独立記念日に66歳になったプリンス・マイケル(と以後、略表記します)は、エリザベス女王のいとこにあたる。トム・フォードが魅せられたプリンス・マイケルのトレードマークは、**リッチなタイでビッグなノット**の超古典的スタイル。巨大ノットのタイを、プリンス・オブ・ウェールズ・チェックのスーツや高い襟のシャツとともに、迫力を着こなす。よく手入れされた口ひげとあごひげが、時代錯誤すれすれのスタイルに「エドワードイアン」な趣を添える。エドワードイアンとは、20世紀初頭の、上品で華やかなエドワード7世時代の(雰囲気)のこと。100年前の紳士像を今に再現するお方なのである(ちなみに本欄担当K君は、シャツをオーダーするとき「古いヒトに見えるように」と襟高め、カフ長め、と注文するが、具体的イメージとして持参するのがプリンス・マイケルの写真であるという)。

## 紳士のアイコン、プリンス・マイケル・オブ・ケント

**世**のカジュアル化の流れに優雅に逆行するプリンス・マイケルは、デイヴィッド・ニーヴン、ロレンス・オリヴィエらが体現してきた「ザ・イングリッシュ・ジェントルマン」の王道イメージの系譜に連なる、貴重なアイコンでもある。

だからこそ、サヴィル・ロウ・ビスポーク協会は彼に白羽の矢をたて、2007年にイタリアのピッティ・ウオモに初参加するとき、「サヴィル・ロウの顔」としてプリンス・マイケルに同行してもらった。

結果、プリンス・マイケルはファッション界にあらためて強いインパクトを残したようで、米「エスクァイア」誌は2008年度のベストドレッサーに、バラク・オバマ(政治部門)、クリスチャン・ベイル(俳優部門)とともに、王室部門においてプリンス・マイケル・オブ・ケントを選んだ。

英国内での評価を見れば、英「GQ」が選ぶ全部門ベストドレッサーのリストにおいて、プリンス・マイケルは34位。王室部門だけでいえば12位のハリ王子、25位のチャールズ皇太子、33位のエディンバラ公(エリザベス女王の夫君)に次ぐ4位である(長男ウィリアム王子はどこへ!? ちなみに総合1位はダニエル・クレイグ)。

一般紙での注目度も高まる。「タイムズ」紙は、プリンス・マイケルのスーツを「最後のロシア皇帝に生き写しのダブルのスーツ」と表現するのだが、それは彼がロシアのロマノフ王朝最後の皇帝、ニコライ2世と容姿が似ていることをふまえている(プリンス・マイケルのおじいさんにあたる英国王ジョージ5世は、ニコライ2世のいとこだった)。ロシア語を流暢に話し、休暇でもしばしばロシアを訪れる、大のロシア好きとしても知られる。経済的に急成長するロシアとの関係が重要になるなか、ロシアとのつながりが深いプリンス・マイケルが外交の上でもますます大切な役割を果たしていくのではないかと。

**ス**ーツ姿が美しいのは、カットティングのみならず、それを生かす身体の管理も怠らないことによるようだ。1週間に3回、ジムでワークアウトをする。若い頃からスピードやスリルを楽しむスポーツを好んできた。カーレース、ボブスレー、それにヘリコプターや飛行機、ボートの操縦…。ぴかぴかに磨かれた靴と完璧なスーツで優雅なふるまいを見せたかと思えば、スリルとスピードの世界を満喫。ちよつと007、入ってます。

奥さまのプリンス・マイケル・オブ・ケントことマリリークリスチーナは、華やかな雰囲気的美女で、本も数冊出版している。最新刊が「蛇と月 (Serpent and the Moon)」。団鬼六先生の路線ではなく、ルネサンス時代のフランスの宮廷を舞台にした恋愛小説らしい。いずれにせよ、王室にはちよつと珍しい、離婚歴のあるキャリアウーマンである。

超クラシクな紳士のアイコンを演じきりながら、プライベートでは型破りで現代的な意外性も見せる。プリンス・マイケル・オブ・ケント、66歳にして今後がなお楽しみ。

### Kaori Nakano

服飾作家。4月より明治大学特任教授。ファッション文化史を講じる。UOMOが提唱するエレガンスを、毎回人物を切り口にしてわかりやすくもときます。著書に「モードの方程式」(著るものがない!) (ともに新潮社) などがある。